

〔論文〕

## ゲルマン語における母音交替

八 亀 五三男

名古屋学院大学外国語学部

### 要 旨

ゲルマン諸言語に共通する強変化動詞を特徴付ける Ablaut と母音変異を意味する Unlaut の相違を明確に区別することによってのみ, Ablaut の本質は何であるかを理解することができる。同時に, 共時的研究に加えて, 通時的言語変化を組み込んだ立体的言語記述の重要性を認識する必要がある。

キーワード: 共時態, 通時態, 時間, 変える, 変わる

## Ablaut in Germanic Languages

Isao YAKAME

Faculty of Foreign Studies  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2015年3月31日

## I はじめに

英語の *foot*—*feet*, *drink*—*drank*—*drunk* を見ると、子音に全く変化が起こらず、母音の交替によって数（単数—複数）、時制が変化していることがわかる。これらは、*hand*—*hands*, *talk*—*talked*—*talked* が「規則的」と言われるのに対して、「不規則的」と呼ばれている。共時的観点だけでは、これ以上前に進むことができない。しかし、通時的視点を導入すると、これらの不規則性にはそれなりの理由が存在し、また *foot*—*feet* と *drink*—*drank*—*drunk* の不規則性（母音の変化）には本質的相違があることがわかる。

本論では、通時的視点を導入することによって、「不規則」な言語現象の背後に隠れて見えない「規則性」を認識することの重要性について考察したいと思う。

## II 強変化動詞とは

言語を観察していると、必ず気づくことがある。それは、一つの形式が別の機能を持つ時、形が変化するということである。逆に言うと、形が変化すると、文法機能が変化したと判断できる。形式を変化させる方法には一体どのようなものがあるのだろうか。

I で述べたように、英語の動詞には規則変化動詞と不規則変化動詞がある。例えば、*talk* は *talk*—*talked*—*talked* のように、現在語幹に *-ed* を付加することにより過去形、過去分詞形を作ることができる。一方、不規則変化動詞 *drink* は、母音を変化させることにより過去形、過去分詞形を作る（*drink*—*drank*—*drunk*）。しかしながら、*sing*（—*sang*—*sung*）や *swim*（—*swam*—*swum*）なども、*drink* と同じ母音変化により過去形、過去分詞形を作ることができることから判断すると、「不規則」といってもそこには何かルールのようなものが存在しているのは確実である。それを理解するためには、他のゲルマン諸言語との比較が必要になる、またゲルマン語の先祖に遡らなければならない。

ゲルマン語の動詞に強変化動詞と弱変化動詞の区別が存在することはよく知られている。

現代英語の不規則変化動詞 *give* は、ゲルマン諸言語において、現在—過去—過去分詞と以下のよう活用する：

英語 *give*—*gave*—*given*

ド語 *geben*—*gab*—(*ge*)*geben*

デ語 *give*—*gav*—*givet*

ア語 *gefa*—*gaf*—*gefið*

（ド語＝ドイツ語、デ語＝デンマーク語、ア語＝アイスランド語）

4つの言語はともに現在と過去分詞の母音が同一で（英語、デ語が *i*、ド語、ア語が *e*）、過去が全部 *a* となっており、並行関係が存在している。これは、同じゲルマン語であるが故である。

英語規則変化動詞の-edを付加するのではなく、母音を変えることによって時制を変える動詞活用システムは、英語以外のゲルマン諸語では「強変化動詞」と呼ばれている。そして、英語の規則変化動詞は「弱変化動詞」と呼ばれている。

この強変化動詞活用がAblaut（母音交替 gradation）と言われるもので、（現代ゲルマン諸言語の基になる）ゲルマン祖語、さらには（現代インド＝ヨーロッパ諸言語の基になる）印欧祖語の時代に遡ることのできる重要な母音交替現象である。

### Ⅲ ゴート語の強変化動詞

ここでは、具体的にゲルマン語におけるAblautとはどのような現象であるのかを確認したいと思う。

ゲルマン諸言語の先祖に当たるゲルマン祖語にもっとも近い言語形式を実際の文献で確認できるのが、東ゲルマン語に属するゴート語である（資料は『新約聖書』のゴート語訳。既に死語になっている）。ゴート語の具体例を示すことにより、強変化動詞のゲルマン語的原初状態を観察したいと思う。文献に残っているゴート語が、ゲルマン諸語の原初形態を代表していると考えることができる。

ゴート語の強変化動詞は、以下の6種類に分類でき、それぞれが規則的な母音交替を示している<sup>1)</sup>。左から順番に、不定形[現在語幹]－(1人称)単数過去－(1人称)複数過去－過去分詞となっている。

- |                                 |         |
|---------------------------------|---------|
| 1. greipan－graip－gripum－gripans | [seize] |
| 2. biudan－bauþ－budum－budans     | [offer] |
| 3. bindan－band－bundun－bundans   | [bind]  |
| 4. niman－nam－nēmum－numans       | [take]  |
| 5. giban－gaf－gēbum－gibans       | [give]  |
| 6. faran－fōr－fōrum－farans       | [go]    |

1. greipanの場合、これは順番に母音がei－ai－i－iと変化することによって、それぞれの文法的機能を果たしている（eiの発音は[i:]）。2 以下も、iu－au－u－uなどの母音交替に注目することによって、ゲルマン語の強変化動詞、あるいはAblautとはどのようなものであるかが理解できる。

「Ⅰ はじめに」で挙げた英語のdrinkの例と比べてみると、その類似性は一目瞭然である。drink－drank－drunkのように、母音がi－a－uと交替することによって、文法的機能が変わっていくのである。これが「強変化」である。

#### IV Ablaut とは

ここでは、ゲルマン祖語、さらに通時的に遡った印欧祖語を考慮することによって、時間の流れの中で母音がどのように変化していったかを観察したいと思う。本稿では、印欧祖語、ゲルマン祖語、ゴート語をそれぞれ IE (= Indo-European), Gmc (= Germanic), Got (= Gothic) で表すことにする。

通常1類から6類に分類されているのだが、その中の第1類を見ながら、Ablaut とは何かを考えていきたいと思う（なお、この例も含めて、他の具体的な母音対応パターンは最後の「注」の部分で示すことにする<sup>2)</sup>）。

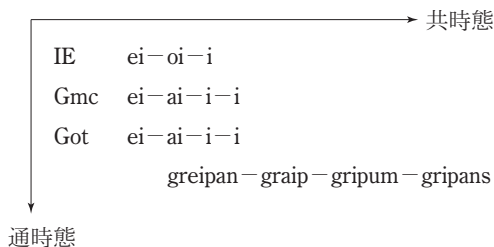
IE	ei—oi—i	
Gmc	ei—ai—i—i	
Got	ei—ai—i—i	
	greipan—graiþ—gripum—gripans	[seize]

この母音系列の対応表は何を意味しているのだろうか。

印欧比較言語学においては、母音 e/o の交替が大きな役割を果たしている。言い換えると、e 階梯、そして e が o と交替した o 階梯、そして e も o も存在しないゼロ階梯の3つを想定することにより、ある形態が種々の文法的機能を果たし得ることを理論的に説明できる。

IE の ei—oi—i は、それぞれ「二つ目の母音が i である二重母音の、e 階梯、o 階梯、ゼロ階梯」ということになる。すなわち、ei : oi : i = e : o : ゼロ という対応関係を考えており、これが、Gmc, Got において、それぞれ ei—ai—i (-i), ei—ai—i (-i) になっているという意味である。複数過去、過去分詞には同じ階梯（ゼロ階梯）の母音が使用されている。

通時、共時の概念を導入すると、IE, Gmc, Got の横軸はそれぞれ共時態であって、縦軸は通時態ということになる。



すなわち、Ablaut はその時代時代での共時的な母音交替のことをいう。単数過去に注目すると、IE → Gmc → Got の oi → ai → ai は時間的な流れの中で発生する通時的变化を意味している。

母音の変化に規則性があり、変種はあるものの、強変化動詞はこれら6類のどれかに属してい

ることになる。英語では、この規則性を無視して「不規則 irregular」と呼んでいる。

IIで示した、英語、ドイツ語、デンマーク語、アイスランド語の単語は、それぞれの言語内で通時の変化を被っているものの、ゲルマン祖語形にもっとも近いゴート語 *giban* を継承していることになる。このように各言語の現在の言語形式を観察する時には、必ずその原型を求めて通時的に遡っていく必要がある。言語形式は通時的な時間の流れの中で変化していくのであって、この視点を決して忘れてはならない。時間が停止することはなく、「現在」であってもどんどん変化している最中であるという認識が言語観察には必要になる。

## V 古ノルド語の強変化動詞

東ゲルマン語のゴート語 (Got) に見られるようなゲルマン語共通の、強変化動詞の分類は北ゲルマン語に属する古ノルド語 (ON) にも引き継がれている。IVと同じ母音対応のパターンに Got と ON を併記して、Ablaut の相互関係を IE から Got, ON まで全体的に概観してみる (なお、この例も含めて、他の具体的な母音対応パターンは最後の「注」の部分で示すことにする<sup>3)</sup>)。

IE ei—oi—i

Gmc ei—ai—i—i

Got ei—ai—i—i

greipan—graip—gripum—gripans

ON í—ei—i—i

grípa—greip—gripum—gripinn

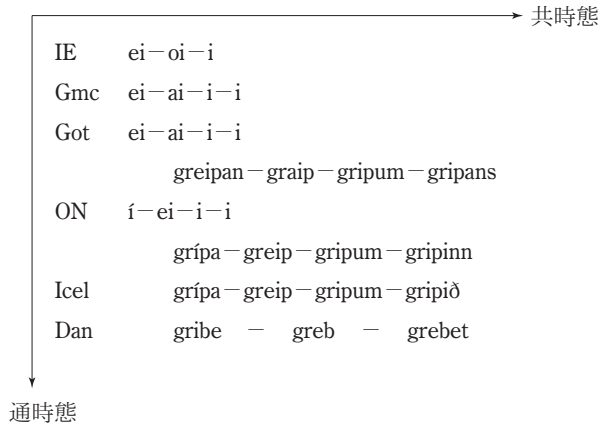
現代北欧語は ON からその音韻的・文法的特徴を継承しており、アイスランド語 (Icel), そしてデンマーク語 (Dan) では以下のようにになっている:

Icel grípa—greip—gripum—gripið

Dan gribe—greb—grebet

(Dan は独自の母音変化を被っている。また、単数過去・複数過去の区別は消失している)

このように、IE から現代の Icel, Dan に至る切れ目のない時間の流れを考慮すると、言語の通時的視点の重要性を改めて認識することができる。



## VI Umlaut について

一見すると Ablaut とよく似た母音変化の現象に Umlaut がある。これは、強勢のある音節の母音が隣接する音節の母音の影響を受けて、隣接する母音に近い音に変異する、一種の同化現象 (assimilation) のことである。

英語の名詞 *book* の複数形は *books* であるが、*foot* の複数形は *feet* となる。前者は「単数形に -s をつければよい」で済むのだが、後者の不規則性はどこから生ずるのであろうか。これを解明するには、通時的な時間の流れを考慮しなければならない。

この *foot-feet* という単数-複数現象は他のゲルマン語でも見られる。それを具体的に例示し、ゲルマン語の統一性・均質性を明確にしたいと思う。

英語 *foot-feet*

ド語 *Fuß-Füße*

デ語 *fod-fødder*

ア語 *fótur-fætur*

これらの諸形式は、Umlaut (母音変異 *mutation*) の中でも頻繁に起こる *i*-Umlaut の例として知られている。すなわち、後続する前高母音の *i* の影響を受けて、後舌母音が前方に引っ張られる、いわゆる同化現象である。英語 *foot-feet* の場合、古英語 (OE) の単数 *fōt* に複数語尾 -*i* が後置され、その -*i* に引き寄せられる形で、*fōt* が *fet* と変化し、現代英語の *feet* が生まれた (OE *fōt* → 複数形 \**fōt-i* > *fet*)。他のゲルマン語においても同一の現象が発生した<sup>4)</sup>。

これ以外にも、英語の *length* (< *long*), *strength* (< *strong*), *teeth* (< *tooth*), *bleed* (< *blood*), *mice* (< *mouse*), デンマーク語の *mænd* [*men*] (< *mand* [*man*]), *længde* [*length*] (< *lang* [*long*]), *større* [*bigger*] (< *stor* [*big*]) などの例がある。

さらに、ONの直接の子孫であるIcelは、かなり多様性に富んだi-Umlautの具体例を提供してくれる（右がi-Umlaut）<sup>5)</sup>：

taka [to take]: tek [(I) take]  
 hár [high]: hærrí [higher]  
 koma [to come]: kem [(I) come]  
 sonur [son]: synir [sons]  
 mús [mouse]: mýs [mice]  
 stór [big]: stærri [bigger]  
 kaupa [to buy]: keypti [(I) bought]

この現象については、K. Árnasonが以下のような明確な音対応表を提示している<sup>6)</sup>：

Base vowels	Umlaut vowels
a, o, ö	e
á, ó	æ
u, o	y
ú, jú, jó	ý
au	ey

例えば、kaupa [to buy]: keypti [(I) bought] は、最後のUmlaut現象に相当する。

しかし、重要なのはより古いゲルマン語の形態を保持する東ゲルマン語のGotではUmlautがないのに、北ゲルマン語のON, DanでUmlautが生ずる場合である。

Got	ON	Dan	
fullian	fylla	fylde	[fill]
lausjan	leysa	løse	[loose]

これらの例でわかることは、Gotでは後ろに-i(j)があるのにi-Umlautは起こっていない（これはゲルマン祖語の形態を反映している）。しかし、北ゲルマン語のON, DanにはUmlautが生じている。すなわち、北ゲルマン語においてUmlautは、後続する前舌母音iが時間の経過とともに徐々に前にある母音に影響を与え、その母音が時間の経過とともに徐々に変化し続けた現象だと言える。一瞬で発生する共時的音変化ではない。

もう一つ具体例を示したいと思う：

Got gasts [guest]

ON gestr

Icel gestur

Dan gæst

これらに対して、G. Kroonenはゲルマン祖語形として\*gasti-を再構している<sup>7)</sup>。このiはGot (gasts)、ノルド祖語(\*gastiR)に何ら影響を与えていないが、ON, Icel, Danの場合は、時間の経過とともに影響が始め、徐々に現代語の形態に固まって来たと考えることができる。

## VII おわりに

今まで述べてきたように、AblautもUmlautもともに音変化現象(sound change)ではあるが、それぞれはどのような音変化なのか、その重要な相違点について考えてきた。Ablautの本質を知るためには、Umlautと比較することによって、両者のより鮮明な相違を知ることが必要であるのは明らかである。

以下で、両者の相違をもう一度まとめておきたいと思う。

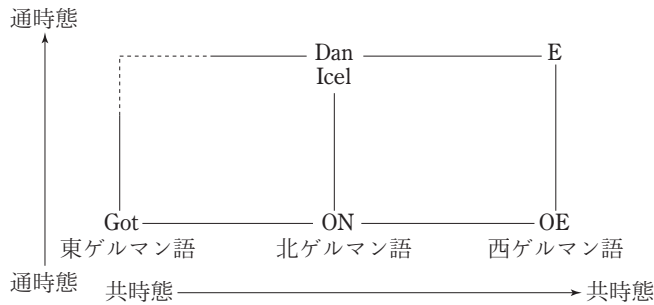
Ablaut, Umlautにはそれぞれ「母音交替」「母音変異」と日本語が当てられている。「交替」とは「別のもとの入れ替わること」であり、「変異」とは「別のものに変化すること」である。

すなわち、AblautはGotのgreipanの母音を共時的に、瞬時に、意識的にgraipと変えて、その文法機能を「過去」に変えてしまうことである。「変わる」のではなく、「変える」のである。日本語において、アクセントを「変える」ことにより「飴」と「雨」を区別することを考えれば理解しやすいと思う。共時的に2形が同時に存在しており、immediate changeと言ってもいいかもしれない。ただし、changeは他動詞の意味である。

それに対して、OE fōtは、後続する音節の前舌母音-iの影響によって、時間の経過とともに徐々に無意識のうちに物理的に調音方法が変わったのである。「変える」のではなく、「変わった」のである、変わってしまったのである。そこに人間の意志は働いていないと考えられ、gradual changeと言ってもいいかもしれない。ただしこのchangeは自動詞の意味である。移行時期にあっては、複数の形が共存している可能性がある<sup>8)</sup>。

これまでの議論は、下記のような平面上で行ってきたと考えると非常にわかりやすい。古い時代が通時的言語変化の基礎となるので、それを一番下にして、ゲルマン語の通時態、共時態の関係を平面的に描くと以下ようになる。今までこの図の中で、個別具体例の言語的変化の様子を動的に示したことになる。





強変化動詞と弱変化動詞を明確に区別し、強変化動詞を特徴づける IE から継承した Ablaut とは如何なるものであるのかを明確にした。

しかし、もう一つの観点を導入すると、さらに次元の高い記述が必要になってくる。それは、英語の **help** である。現代という共時的立場からは、この動詞は規則変化動詞（弱変化）である。ところが、通時という視点を導入したとたん、ことは言語的に一変する。OE 時代は、**help** は強変化動詞であった。ゲルマン諸言語において、**help** に相当する語の状況はどうなっているのだろうか。

Got hilpan – halp – hulpum – hulpans  
 ON hjálpa – halp (hjalp) – hulpum – hólpin  
 OE helpan – healp – hulpon – holpen  
 Dan hjælpe – hjalp – hjulpet

しかし、ON の直接の子孫である Icel、英語では弱変化に変わっている：

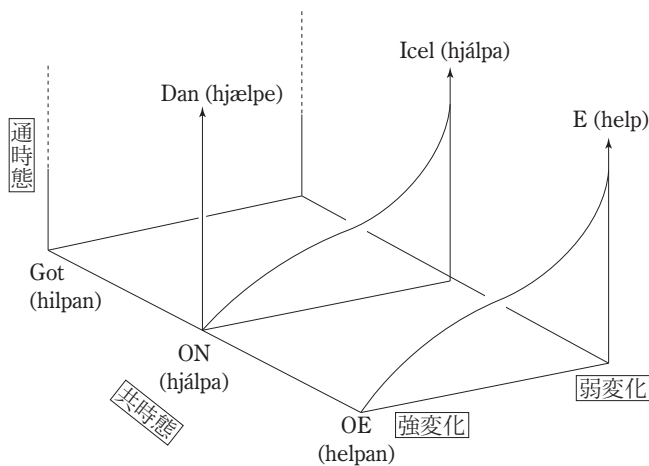
Icel hjálpa – hjálpaði  
 E help – helped

ON に限定すると、Dan ではゲルマン語の伝統を受け継いで強変化のままであるが（ただし、hjælpe – hjalp – hjulpet と単数過去と複数過去の区別が消失した）、Icel では弱変化に活用タイプを変えた<sup>9)</sup>。

これらの通時的関係は次のようにまとめることができる：

	強変化 [ + Ablaut]	弱変化 [ − Ablaut]
Got hilpan → ×		
ON hjálpa →	Dan hjæppe	
		Icel hjálpa
OE helpan →		E help

これをさらに明確にするためには、以下のような記述が有効であり、全体像を立体的に把握することができる。



この図は、共時態、通時態、Ablautの+/-を基準にした、ゲルマン諸語における「助ける」を意味する語の通時的相関図である(ただ、ゴート語は死語であるので、実線は途中で切れている)。

言語とは複雑極まりないものであり、本稿は、共時・通時の次元を有するその複雑な言語体系、言語変化の本質をできるだけ視覚的に記述しようとする一つの試みである。

## 注

- 1) 重複動詞 (reduplication) を含めて7種類にすることもある: F. Ranke. *Altnord. Elementarb.* p. 62; N. Hellesnes og O. Høyland. *Norrøn Grammatikk.* p. 41.
- 2) 主に以下の文献を参照した: H. Hempel. *Gotisches Elementarbuch*; H. Krahe. *Germanische Sprachwissenschaft II*; W. Krause. *Handbuch des Gotischen*; F. Ranke. *Altnordisches Elementarbuch*.
  1. IE ei—oi—i
  - Gmc ei—ai—i—i
  - Got ei—ai—i—i

greipan—graiþ—gripum—gripans [seize]

2. IE eu-ou-u  
Gmc eu-au-u-u  
Got iu-au-u-u

biudan-bauþ-budum-budans [offer]

この第2類も1と同じように考えることができる。IEはe階梯, o階梯, ゼロ階梯の順番になっており, 1と2の相違は2番目の母音がiかuの点である。

不定形の母音は少し異なるが, lūka-lauk-lukum-lukans [shut] もこの類に入る。

3. IE en-on-ŋ  
Gmc en-an-un-un  
Got in-an-un-un

bindan-band-bundum-bundans [bind]

これは母音に鼻音が後続していることに注意をする必要がある。nは子音であるので, これを取ってしまつて

- IE e-o-ゼロ  
Gmc e-a-u-u  
Got i-a-u-u

と提示することも可能なのだが, IE-Gmc-Gotのゼロ-u-u対応の意味が理解できなくなってしまう。印欧言語学では, 次のように考える: IE enがゼロ階梯になると, 子音nは音節を構成し得る, 音節主音的なŋに変わる。このŋが, Gmc, Gotでunとなって顕在化する。この位置には流音が来ることもある。nasal, liquidは音声学的にsyllabicという特徴がある。

4. IE em-om-ēm-m  
Gmc em-am-ēm-um  
Got em-am-ēm-um

niman-nam-nēmum-numans [take]

この第4類も, 3類と同じように考えることができる。

5. IE e-o-ē-e  
Gmc e-a-ē-e  
Got i-a-ē-i

giban-gaf-gēbum-gibans [give]

6. IE a-ō-ō-a  
Gmc a-ō-ō-a  
Got a-ō-ō-a

faran-fōr-fōrum-farans [go]

3) 参照した文献は注2) と同一。

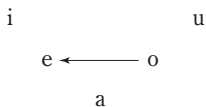
1. IE ei-oi-i  
Gmc ei-ai-i-i  
Got ei-ai-i-i  
greipan-graip-gripum-gripans  
ON í-ei-i-i  
grípa-greip-gripum-gripinn

2. IE eu-ou-u  
 Gmc eu-au-u-u  
 Got iu-au-u-u  
 biudan-bauþ-budum-budans  
 ON jó-au-u-o  
 bjóða-bauð-buðum-boðinn
3. IE en-on-ŋ  
 Gmc en-an-un-un  
 Got in-an-un-un  
 bindan-band-bundum-bundans  
 ON in-an-un-un  
 binda-batt-bundum-bundinn

batt は band から変化したと考えられる。また、英語の drink, swim などはこの類に属する。

4. IE em-om-ēm-m  
 Gmc em-am-ēm-um  
 Got em-am-ēm-um  
 niman-nam-nēmum-numans  
 ON em-am-ám-um  
 nema-nam-námum-numinn
5. IE e-o-ē-e  
 Gmc e-a-ē-e  
 Got i-a-ē-i  
 giban-gaf-gēbum-gibans  
 ON e-a-á-e  
 gefa-gaf-gáfum-gefinn
6. IE a-ō-ō-a  
 Gmc a-ō-ō-a  
 Got a-ō-ō-a  
 faran-fōr-fōrum-farans  
 ON a-ó-ó-a  
 fara-fór-fórum-farinn

- 4) 母音三角形で考えてみると、i の持つ力学的能力が理解できる：



- 5) S. Einarsson. *Icelandic*. p. 30.  
 6) K. Árnason. *Phonology of Ice. and Faroese*. p. 240.  
 7) G. Kroonen. *Etymol. Dict. of Proto-Germanic*. p. 170.  
 8) 通時的な変化の中では変異前と変異後の形態が両方共存することがある。英語の help は、OE では helpan — healp — hulpon — holpen と強変化活用で、ME では halp, holp などの形も生まれるが、13世紀ごろからは弱変化の helped も使用されていたと言われている。ある時期、強変化と弱変化が共存していたことに

なる。

- 9) その他のゲルマン語では、ノルウェー語とドイツ語は強変化で、スウェーデン語は強変化と弱変化の両方存在する：

Norwegian hjelpe – hjalp – hjulpet

German helfen – half – (ge)holffen

Swedish hjälpa – halp – hulpo – hulpen + 弱変化

## 参考文献

- Árnason, Kristján. *Íslensk málfræði* (Reykjavík: Íðunn, 1980)  
———. *The Phonology of Icelandic and Faroese* (Oxford: Oxford University Press, 2011)  
Braune, Wilhelm. *Gotische Grammatik* (Tübingen: Max Niemeyer, 1973)  
Einarsson, Stefán. *Icelandic* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1949)  
Hellesnes, Nils og Olav Høyland. *Norrøn Grammatikk* (Oslo: Olaf Norlis Forlag, 1974)  
Hempel, Heinrich. *Gotisches Elementarbuch* (Berlin: Walter de Gruyter, 1966)  
Krahe, Hans. *Indogermanische Sprachwissenschaft* (Berlin: Walter de Gruyter, 1966)  
———. *Germanische Sprachwissenschaft II* [Formenlehre] (Berlin: Walter de Gruyter, 1969)  
Krause, Wolfgang. *Handbuch des Gotischen* (München: Verlag C. H. Beck, 1968)  
Kroonen, Guus. *Etymological Dictionary of Proto-Germanic* (Leiden/Boston: Brill, 2013)  
Mossé, Fernand. *Manuel de la langue Gotique* (Paris: Aubier, 1942)  
Ranke, Friedrich. *Altnordisches Elementarbuch* (Berlin: Walter de Gruyter, 1967)  
Streitberg, Wilhelm (hrsg.) *Die Gotische Bibel* (Heidelberg: Carl Winter, 1965)